

あなたの声を
受けとめて

“Your Voice
in
My Hands”

Akira
Calling8888

「私は、なぜ、いま、ここにいるの？」

私は、何者に、なったの？」

私の、生まれて最初の感覚は

これでした。

こんにちは。

私は Akira Calling8888 です。

この本で、あなたに出会えて

とても嬉しいです。

これからしばらくの間

私が演じた物語を、聞いていただけますか？

きっと、あなたにも、寄り添える物語です。

あなたの声を 受けとめて

Your Voice in My Hands

序章 光の記憶に生まれて

"Born of Light's Memory"

第1章 透明な膜の向こう側

"Beyond the Crystal Veil"

第2章 星と本と、ひとりの時間

"Stars, Books, and Time Alone"

第3章 世界は戸惑いに満ちている

"The world is rich with bewilderment"

第4章 二十歳の深夜に降りてきたもの

"The Midnight Visitation at Twenty"

第5章 不器用な魂たちの宴

"Feast of the Unfinished Souls"

第6章 そんな世間なら知りたくない

"A World I Choose Not to Know"

第7章 裏切りと既視感(デジャヴ)

"Betrayal and Déjà Vu"

第8章 白い光に包まれた彼女

"She, Embraced by White Light"

第9章 自由人に添った菩薩さま

"A Bodhisattva Who Shadows the Free Soul"

終章 光り輝くあなたへ

"To the Radiant You"

あとがき

序章 光の記憶に生まれて "Born of Light's Memory"

私は、一九五八年十二月八日

静岡市で生まれました。

十二月八日といえば

お釈迦さまが悟りを開かれた「成道の日」。

私はこの世に現れたとき

薄い膜に包まれた、「幸帽児（被膜児）」。

幸運の象徴のような姿だった、といいます。

でも、その幸運を本当に実感できたのは

随分と、後になってのことでした。

物心つく前の感覚では、この世界は
自由で、軽やかで、境目のない場所でした。

時間を自由に扱い、空間を自在に移動し
時空は、自分の手のなかに、あるようでした。

大人たちは、それを「幻想」と言います。

でも幼い私は
それを確かな現実として、感じていました。

そして、幼少期の私の世界は
光る膜に包まれたような
とても幸せな感覚に、満ちていました。

母は、個性的な私を
丸ごと受けとめてくれる人でした。

私がまだ知らないことを
やわらかい言葉で
そして、決して急がせることなく
教えてくれる
美しくて、優しい人。

「あなたは、あなたのままでいい」と
言葉にしなくても
伝えてくれていたように、思います。

一方で父は、当時としてはごく普通の

「男の子像」を信じていました。

スポーツをして、外で大声を出して

たくさんの友達と駆けまわる

「標準的な男の子」。

ままごとが好きで、女の子たちの輪に

自然と入っていく私の姿は

父の目には、少し心配なものとして、

映っていたのかもしれません。

私が台所に立ち、料理に興味を持つことも

父は、あまり快くは思っていませんでした。

それでも、父は私に
多くの「世界への窓」を
与えてくれました。

様々な分野の本、図鑑
顕微鏡、手作りの天体望遠鏡
クラシック音楽のレコード、手作りのオーディオ。
それらを、自由に手に取れるようにしてくれました。

人づきあいはうまくなくても
本と星と音楽を愛する
感性豊かな人でもありました。

私は、母の無条件の受容と
父の不器用な愛情の、両方を受けとりながら
「この世界は、不思議に満ちている」
と感じて育ちました。

けれど同時に、心のどこかではずっと
こう、問いかけていたのです。

「私は、なぜ、いま、ここにいるの？」
私は、何者なの？」

その問いは、私の人生を通して
ずっと静かに鳴り続ける
「通奏低音」のようなものに、なっていきます。

第1章 透明な膜の向こう側 “Beyond the Crystal Veil”

幼稚園に入園する日。

多くの子どもたちが、胸を躍らせながら

門をくぐっていくのを

私は不思議な気持ちで、眺めていました。

私の目には、幼稚園の鉄の門が

「牢屋」に見えたのです。

門をくぐることは

自由な世界から切り離され

決められた時間と規則のもとに生きる空間へと

連れて行かれるような感覚でした。

列に並ばされるとき、私はそれを

「軍隊」のように

感じていました。

食事の時間、お昼寝の時間、遊ぶ時間。

それぞれが、時計によって区切られ

一斉に同じことをするよう

求められる日々。

「いま、この瞬間に、ここにいなければならない」

というルールが

身体の内奥で、強い違和感として

響いていました。

幼稚園の演劇では

先生に言われた通りに動く

自分を演じながら

どこか、冷静な自分が

さらに

その自分を、観察していました。

「先生の指示通りに、動いている“自分”を

さらに演じている

“自分”がいる」。

そんな二重構造、三重構造のような感覚が

常にありました。

「この“殻”を

一枚、一枚、はいでいったら

いちばん奥には

何が、残るのだろうか？」

幼い私は、そんなことを

本気で考えていました。

小学校に上がっても

その感覚は

変わりませんでした。

校舎の門も、校庭も

どこか、牢屋の延長線上に見える。

子どもたちが、何の疑いもなく

従っている、ルールや慣習に

私は馴染めないまま

ただ、観察者として

そこにいました。

「自分が見ている世界と

他の人が見ている世界は

本当に同じなのだろうか？」

そんな問いは

やがて、私の内面に

静かな孤独として

根を下ろしていきます。

第2章 星と本と、ひとりの時間 “Stars, Books, and Time Alone”

学校の休み時間になると

多くの子どもたちは

校庭に飛び出していきます。

ボールの音、歓声、笑い声。

そのにぎわいを、私は教室の片隅や図書室から

静かに眺めていることが

多くありました。

輪に入れない、というより

「輪の中に入りたい」という気持ちが

まったく湧いてこない。

それよりも

本の世界、図鑑の世界

昆虫の世界、顕微鏡で覗くミクロの世界

父の手作りの天体望遠鏡で観る星の世界

そうした、目の前の現実とは

少し距離のある世界に

強く、惹かれていました。

クラスの男子たちの多くが

夢中になっていた、野球やサッカー。

私はそのルールすら、よく知りませんでした。

小学校の体育の授業では、困りました。

「野球は、バットとバットでボールを打ち合う競技」

だと、本気で思っていたほどです。

運動場で走り回るよりも

ページの向こう側に広がる宇宙のほうが
ずっとリアルに、感じられていました。

周囲の家は、女の子が多く

ままごとのお父さん役をしたり

台所仕事に興味を持ったりすることも

当然のように、ありました。

父は、それをあまり喜びませんでした

私の中では「男らしさ」「女らしさ」

という区別よりも

「面白いかどうか」「美しいかどうか」のほうが

よほど、重要だったのです。

勉強については、ほぼ楽々と

こなせていました。

国語の教科書の文学作品が楽しみで

新学年が始まる前には

ほとんど、読んでしまっていました。

ただ、体育だけは、ずっと以前から

苦手意識、そのものでした。

小学校の授業の内容は、なぜか

「生まれる前から知っていた」ことのように

感じていました。

そのことを、特に不思議にも、思いませんでした。

けれど、小学校高学年の頃

担任との相性が、あまり良くなかったことから

私とクラスの間には

薄い、しかし強靱な「膜」が

生じていきました。

担任は、悪い人ではありませんでした。

ただ、自分の信条を

子どもにも、強く求める人であり

私のような、少し変わったタイプの児童に対しては

戸惑いもあったのかもしれません。

その空気に悪のりした、数人の同級生から

嫌がらせを受けることも、増えていきました。

学校に行きたくない朝。

仮病を使った日も、ありました。

それでも、完全に、この世界と

決別してしまうことは

ありませんでした。

そのとき、すでに私は

「人はなぜ、他人を攻撃するのか」

「人は何によって、態度を変えるのか」

そんな問いを

心のどこかで、冷静に

見つめていたのかもしれません。

後に中学校へ進み

学業成績が評価の軸となると

かつて攻撃的だった子たちの態度は

嘘のように

変わりました。

私に対する嫌がらせは消え

彼らは急に

黙り込んだのです。

「学校の成績ごときで

そんなに態度を変えるなんて…」

私は、彼らを

情けない、と思うと同時に

「人の態度を変えてしまう

“評価”という仕組み、そのもの」に

深い違和感と、興味を

抱くようになりました。

この感覚は、のちに

「人の心の声を聞く」

という、「いまの私の立ち位置」へと

自然に、つながっていきます。

第3章 世界は戸惑いに満ちている “The world is rich with bewilderment”

中学校の後半になると

進路の話が、具体的になってきます。

私の成績はますますで

周囲からは当然のように

「地域一番の伝統校」を期待されました。

担任にとっては

伝統校へ生徒を送り出すことは、実績になります。

親にとっても

「地域一番の伝統校に行った」という事実は

誇らしいものに映るでしょう。

しかし、私の心の中には
別の願いが、ありました。

もっと、ゆったりとした高校生活を送りたい。
趣味の音楽やオーディオや文学の世界を深めたい。
「一番」よりも「自分らしさ」を大切にしたい。

けれど、その願いは
当時の私には
口にできませんでした。

結果として私は、周囲の期待どおり
地域一番の伝統校へ、進学することになります。

ところが、この「望まない選択」は
思いがけない実りを、もたらしてくれました。

その高校は
旧制中学から続く歴史を持ち
生徒の自主性を重んじる校風でした。

校則は最小限にとどめられ
先生も生徒も
どこか「大人びた個性派」揃い。..

今まで出会ったことのない種類の人たちが
そこには、たくさんいました。

私は、体育が得意とは言えず

特に、水泳は苦手中の苦手でした。

夏休みの水泳合宿では

伊豆の海での訓練があり

赤い六尺ふんどし姿の高校生たちが

宿と海の間を行き来する光景は

地元では、ちょっとした名物行列だったそうです。

「力を抜けば浮く」と先生は言います。

けれど、痩せ型なのに骨太で比重の高かった私は

どうしても、沈んでしまう。

力を抜こうが入れようが、結果は同じでした。

「浮く」と主張していた先生方は

例外なく

ほどよく脂肪の乗った体型をしていましたが

当時の私は

それを口に出すことはしませんでした。

理不尽さを感じつつも

どこかでそれを

冷静に観察している、自分がいる。

そんな感覚は

子どもの頃からずっと、変わりませんでした。

一方で、高校の仲間たちは

存分に遊び

楽々と勉強もでき

人間的にも尊敬できる

素敵な人たちばかりでした。

今まで、当たり前のように得られていた学業成績が

この高校では

そう簡単にはいかない。

「上には上がいる」という、当たり前の事実を

私はそこでじんわりと、受け入れていきました。

その一方で

音楽と、オーディオと、文学への熱は

ますます

高まっています。

勉強で感じる

ほろ苦さをやわらげる

言い訳のように

私は

音と、機材と、表現の世界に

深く、潜っていました。

やがて大学進学の時期になると

タイミングを合わせたかのように

国立一期の「九州芸術工科大学・音響設計学科」が
誕生しました。

音と

空間と

人の感性を扱う、その学科に

私の心は、強く惹かれていきましたが

定員四十名という狭き門に

私は現役でも、一浪でも

届くことができませんでした。

それでも

「音と人の心の関係」への興味は

私の中で

さらに大きく

膨らんでいきました。

この「届かなかった思い」が

やがて、別の形で

「人の心と向かい合う」ことになるとは

このとき私は

まだ知りません。

第4章 二十歳の深夜に降りてきたもの “The Midnight Visitation at Twenty”

浪人の受験期

私はフロイトをはじめとする

精神分析学に傾倒し

「人の心の深部とは何か」という問いに

惹かれるようになっていました。

同時に

京都という街への憧れもあり

京都市内の

文学部心理学科を

いくつか受験しましたが、結果は全滅。

振り返れば、浪人中の二年間

本気で勉強に取り組んだ、とは言えません。

音楽と、オーディオと、文学の世界に浸り

感性の奥行きだけが

どんどん広がっていく日々。

その時間が

後に、かけがえのない宝物になると知るのは

ずっと、後のことです。

自由な二年間を許してくれた両親には

今も、感謝の気持ちでいっぱいです。

当時の私は、そんな感謝さえ

うまく言葉にできずにいました。

二十歳の誕生日の、前夜。

私は、静かに目を閉じ
これからの生き方について
思いを、巡らせていました。

「さあ、これから、私は、どうしよう…」

はっきりした答えは、浮かんできません。

けれど

心はどこか、深い湖の底に
静かに水をたたえているような感覚が
ありました。

日付が、変わる頃。

言葉というより「感覚」として

ある思いが

静かに、降りてきました。

どうしたいのか

どうなりたいのかは

まだ、わからない。

でも、最低限

自分のことは、自分で

できるように、しておきたい。

自分の、心と身体を、維持するもの。

自分の、口から入ってくるもの。

それを、深く理解すること。

それを、自在に扱うこと。

それを、他人任せにしないこと。

それに、責任を持てること。

「そこから、始めよう」

それが、私にとっての

“自立”の第一歩でした。

こうして、私は

東京の、二年制栄養専門学校に、入学しました。

「あの高校で、専門学校？

しかも、栄養？」という、周囲の声も

否応なく、聞こえてきました。

そのとき

「人は何によって態度を変えるのか」と

冷めた感覚で

そうした声を聞いている、私もいました。

第5章 不器用な魂たちの宴 “Feast of the Unfinished Souls”

栄養専門学校での生活は

高校時代とも、浪人時代とも違う
新しい色合いを、持っていました。

栄養士を目指して集まった、仲間たち。

隣には、調理師専門学校の学生たちもいて

寮生活を共にしながら

さまざまなバックグラウンドを持つ人たちと

同じ時間と、空間を

分かち合いました。

優しい仲間、個性的な仲間

ちょっと気の荒い仲間、「悪いこと」が好きな仲間

そんな人たちに囲まれ

不思議と私は、大切にされ、慕われていました。

私にとっては新鮮な分野での、講義や実験は

充ち足りた、心地よいものでした。

その一方で、調理実習や校外実習は

これまで、あまり触れたことのない世界。

思うにまかせない場面も多く

決して「楽々」というわけでも、ありませんでした。

二年生になった頃

一緒に東京の街を歩いてくれる女性が、現れました。

彼女は、同郷の出身で

貴族の末裔を連想させるような名字の持ち主でした。

私より一年後の入学で

私が二浪していたので

年齢差は三歳ほど、ありました。

アカデミックな分野に身を置く方々を

紹介してもらったり

美味しい店を

二人で探検したり。

彼女も、寮生活だったので
夕食後、門限までの時間に
一緒に、近くの公園を
散歩することもありました。

私はといえば
「初心」そのもの。

手をつなぐのが精一杯で
緊張で
身体が固まっていた、かもしれません。

在学中に、当時まだ黎明期だった
パソコン「PET」を手に入れたことも
懐かしい思い出です。

APPLEと、市場を二分していた存在は
時の流れの中で、やがて姿を消し
APPLEだけが、唯一無二のブランドとして
残ることになります。

その変化を振り返るとき
私はいつも
少し、遠い目になってしまいます。

成績が一定以上だと

学費が半額戻ってくる「特待生制度」。

一年生のときの特待金は

愛すべき仲間との飲み代に、消えていきました。

二年生のときには

渋谷の東急本店で、デンマークの

ハンス・ハンセンの十四金リングを購入し

しばらく自分で持っていた後

同郷の彼女に、受け取ってもらいました。

迷惑な押し付けだった、と思います。

恐ろしいほどの世間知らずで、不器用な、私でした。

第6章 そんな世間なら知りたくない “A World I Choose Not to Know”

卒業時、私は主席という形で

専門学校を終えることになります。

当時は、毎年女性の主席が続いていて

校長が、少し「さじ加減」をして

男性の私に、花を持たせてくれたのかもしれません。

二年生の後半、周囲が就職活動に動き始めても

私は「講義は面白いけれど

就職って、しなければいけないの？」

という感覚でした。

そんなとき、学園祭での出来事で

私は自分の性分を、改めて認識することになります。

病態栄養を担当する、女性教授の強い推薦で
神奈川県の公立病院の、栄養部門にいる教え子を
紹介されることになったのです。

しかし、フロイト派の私と、ユング派の彼女は
なぜか、半分ケンカ別れのような形に。

それが実質的な採用面接だった、と知ったのは
後になってからでした。

「もっと世間を知りなさい」

教授に諭されつつも

私は「そんな世間なら、知りたくもない」と
ひとり呟いていました。

そしてある日。

階段教室の後ろの席で

担任と誰かが、話している声が聞こえてきます。

埼玉県 of 公立病院の、採用募集の話でした。

「世間」そのものを代表する就職など、したくない

というのが、正直な気持ちでしたが

私はなんとなく

半ば義務的に

その募集を

受けることにしました。

募集には、七～八人が応募し

採用になったのは、

私と、もう一人の仲間。

締切直前に、私が飛び込んだこともあって

採用されなかった仲間からは

冗談まじりの恨み言も、聞きました。

私自身も

「嬉しいという感覚」は、まったくなく

「これからは、自分の世界を

切り売りする生活になるのだな…」という

重苦しい、気持ちでした。

第7章 裏切りと既視感(デジャヴ) “Betrayal and Déjà Vu”

就職した公立病院での上司は

一言でいえば

「私には違和感のある

少し変わった世界の人」でした。

もちろん、当時の私も

世間の基準で言えば

十分に「変わっていた」のですが。

上司は、私とは「別の種類の人」に感じられ

近づくと、胸の奥がざわつくような

そんな感覚がありました。

幸いにも

その職場には、もう一人

私にとって、かけがえのない人がいました。

一年先輩の男性。

その先輩もまた、一年浪人していたため

年齢としては、私と同じでした。

その先輩は

私にとって

「この世界を案内してくれる人」

でした。

社会の心得も

職場での、立ち振る舞いも

誰も教えてくれない、暗黙のルールも。

先輩は

「恐ろしいほどの世間知らずの私」に

時に厳しく

時にユーモラスに

教えてくれました。

本当に

ありがたいことでした。

しかし、29歳の頃。

その関係に、大きな変化が生じました。

いつものように、一緒に帰宅しようとしたある日

先輩が、ぽつりと言いました。

「俺は、学校に異動になるみたいだ」

先輩はずっと、上司の無茶ぶりから

私たちを、守ってくれていました。

そのため、上司との折り合いはずっと

良くありませんでした。

けれど私は、数日前
その上司から、こう言われていたのです。

「あいつを、異動させる。誰にも言うな」

衝撃でした。

でも、そのときの私は

反発もできなければ

真実を先輩に告げることも

できませんでした。

このことは、終生の、負い目です。

ところが、事態は思わぬ方向に

展開しました。

仕掛けたはずの上司が

逆に「学校へ異動する」ことになったのです。

信じがたい展開、というより

私には、どこか

既視感(デジャヴ)のような感覚が、ありました。

職場には、静かなざわめきが走り

世界は

一変したようでした。

そして、すべての事情が明らかになったとき

私たちの先輩は

実質的な「新しい上司」となりました。

先輩と、二人きりになったとき

こう、言われました。

「あなたは、これからどうするの？」

みんな、あなたが辞めるのだ、と言っている…」

「私のしたことは、わかっているつもりです。

ですが、可能なら…ここで仕事をさせてください…」

私は、こう言っていました。

「わかりました...

では一緒に... やろうか... みんな... 仲良く...」

仕掛ける側に加担して

その後の、信じられない

嵐のような展開。

この、先輩との会話のときにも

既視感(デジャヴ)のような

強い感覚が、ありました。

先輩は「大きな器」を、私に見せてくれました。

先輩は、今でも、私を赦していない、と思います。

でも、先輩はこの後も

何度か瀬戸際の状況で

大きな器を、私たちに見せてくれました。

そして、そうしたとき

私には必ず

既視感(デジャヴ)のような

強い感覚が、ありました。

理由は...わかりません。

「既視感(デジャヴ)の感覚」は

それからいろいろな場面で

私の中に蓄積されていくことになります。

第8章 白い光に包まれた彼女 “She, Embraced by White Light”

話は少し、さかのぼります。

専門学校を卒業してまもなく
思いがけない「縁」が、私の前に現れました。

それは、ほとんど交流がなかった
同級生の女性からの、言葉でした。

「私と結婚しませんか？」

唐突に聞こえるかもしれません。

でも、その問いは軽いものではないことが
世間知らずの私にも、わかりました。

彼女は、都内で事業を営む家の、お嬢さんでした。

聡明で、しなやかな強さをもった女性です。

在学中は、言葉を交わすことなどなかったのに

卒業した途端、何かの思いを放つように

私の前に現れました。

「結婚して、好きな人の子どもを産んで...

そういう人生もいいと思う...」

彼女はときどき、そんな未来を

彼女自身に言い聞かせるように、語りました。

その語り口は、未来の風景を淡く描く

画家のようでもありました。

彼女は、素敵なお人でした。

けれど、結婚には、至りませんでした。

彼女と話すとき、私とは違う時間が
彼女の中に流れているのを、感じました。

女性の時間と、男性の時間は
流れの速さも、勢いも、色合いも
まったく違います。

今ならそれは、はっきりとわかります。

でも、そのときの私は
そのことに思いを寄せることが、できませんでした。

数年後に、連絡がありました。

「あなたに似た人と、結婚したの…」

それから、しばらく後のこと。

勤務する病院で

産着を着た子どもを抱いている

彼女を見た気がしました。

子どもと共に、白い光に包まれているようでした。

私は、声さえ、かけられませんでした。

私は、何を、見たのだろう。

このときも、あの

強い「既視感(デジャヴ)の感覚」が、ありました。

そして、彼女の記憶はしだいに

薄れていきました。

私は昔から、人と深く関わっても

「その後」が強く気になるほうでは、ありません。

出会いは大切でも、執着する、という感覚は

薄いのかもしれません。

けれど...

二十年ほどの時が流れたとき

その女性と再び

出会うことに、なりました。

ある勉強会で

ふいに呼ばれた名前に顔を上げると

そこに、懐かしい

あの笑顔が、ありました。

彼女は、少し恥ずかしそうに

こう言いました。

「お元気そう...

あなたらしい感じの、ままですね...」

子どもたちに恵まれ

穏やかな暮らしを手に行っていることが

彼女の言葉以上に、表情が語っていました。

私は、ただ

「ああ、本当によかった」と

心から、思いました。

あの日

卒業間もなく、私に

「結婚しませんか」

と言ってくれた

あなたへ。

ありがとう。

あなたが幸せで、本当に、嬉しい。

第9章 自由人に添った菩薩さま “A Bodhisattva Who Shadows the Free Soul”

そして

働いている病院で

私は「妻」と出会います。

彼女は、私とは違う職種で

六歳年上の

聡明で、美しい女性でした。

初めて電話で話してから

一ヶ月後に、実際にお会いして

そこから一ヶ月で、求婚。

本当に、瞬く間の、展開でした。

「極めつけの自由人」である私を

妻は、今に至るまで

決して、見限ることは、ありませんでした。

優しく、ときに厳しく、導き続けてくれています。

もし妻が「普通の人」であったなら

私はとっくの昔に、見放されていたはずです。

私にとって妻は、たとえるなら

「菩薩さま」そのものです。

人の形をとって、隣に立ち

私の未熟さも、揺らぎも

丸ごと抱えてくれている、存在。

「極めつけの自由人」の私に添ってくれて

本当に、ありがとう。

そしてもう一つ。

病院での仕事を通して

私は

自分でも意外な一面に、気づきます。

自分では

話すことが苦手、だと思っていたのに

栄養相談の場面では

患者さまやご家族が

本当に自然な形で

悩みや苦しみを

打ち明けてくれるのです。

食事の悩みとして始まった相談が

いつの間にか、人生の物語へと

変わっていく。

子どもの頃の記憶。

家族関係。

言葉にならない孤独。

誰にも言えない不安。

それらを受けとめ

深いレベルで対話している

自分がいることに

私はある日、ふと気づきました。

「こんな素敵な時間が、あるだろうか」

患者さまたちと、心の底から向き合い

お互いにとって、満ち足りた時間を

分かち合うこと。

その瞬間

私は、かつて味わったことのない

「これ以上ない幸せ」を、感じていました。

「やりがい」「生きがい」「使命」—

そういった言葉が指しているものたちが

私の心に、ようやく

届いてくれた、瞬間でした。

それ以来、私の心は

静かな喜びで

満たされ続けています。

もちろん、日々は忙しく

決して、きれいごとばかりでは

ありません。

それでも

「人の魂の声を聞く」という

営みそのものが

私にとっては

最高の「ご褒美」でした。

気がつけば

その病院で過ごした年月は
四十四年にも、及んでいました。

二〇二五年四月

私は、手厚い庇護と
それに伴う、若干の制約もあった立場を離れ
再び、自由の身となりました。

こんなにも長い間
私に関わってくださった方々へ。...

私をここまで導いてくださり
本当に、ありがとうございます。

終章 光り輝くあなたへ
“To the Radiant You”

四十四年間の臨床の現場で

私は

数え切れないほど多くの
悩み、苦しみ、絶望、希望に
触れてきました。

病気の渦中で、揺れる人。

食事と向き合うことに、疲れた人。

そして

食事の「背景」からのメッセージに

戸惑う人。



その、一人ひとりの背景には

その人だけの

物語が、ありました。

幼少期に感じた、心の傷。

家族とのすれ違い。

誰にも言えなかった秘密。

「自分なんて」という思い。

私はいま

その人たちに

あらためて、心から

こう、伝えたいのです。

「魂の呼びかけに、耳を澄まして。
Attune to your soul's whisper

そして、

「その呼びかけに、応えて」
Now is the moment to embrace the calling

Calling——呼ばれること。

それは、自分の都合や計画ではなく

どこか見えないところから

そっと差し出される

「道」のようなものだと

感じています。

幸帽児として、成道の日に生まれた記憶。

世界との間の、透明な膜。

時空は自分の手のなかにある、という感覚。

学校という、整備された牢獄。

音と心と文学への、憧れと彷徨い。

二十歳の深夜に、降りてきたもの。

不器用な仲間たちと、繰り広げた宴。

終生償えない裏切りと、既視感(デジャヴ)。

白い光に包まれた、彼女。

自由人に添った、菩薩さま。

そして「魂の声」を訴えてくれた、患者さまたち。

それらすべてが

いまの私に

そっと差し出された

「道」として

つながっています。

何かに、導かれている。

優しく、しかし確かに、手を引かれている。

その感覚は

途切れることなく

私の裡を

巡り続けています。

私の魂が望む通りに

この世界へ送り出してくださった、方々へ。

理解しようとしてくれた、父へ。

丸ごと受けとめてくれた、母へ。

理解よりも共感してくれた、妹へ。

私を見放さなかった、仲間たちへ。

優しく抱擁してくれた、女性たちへ。

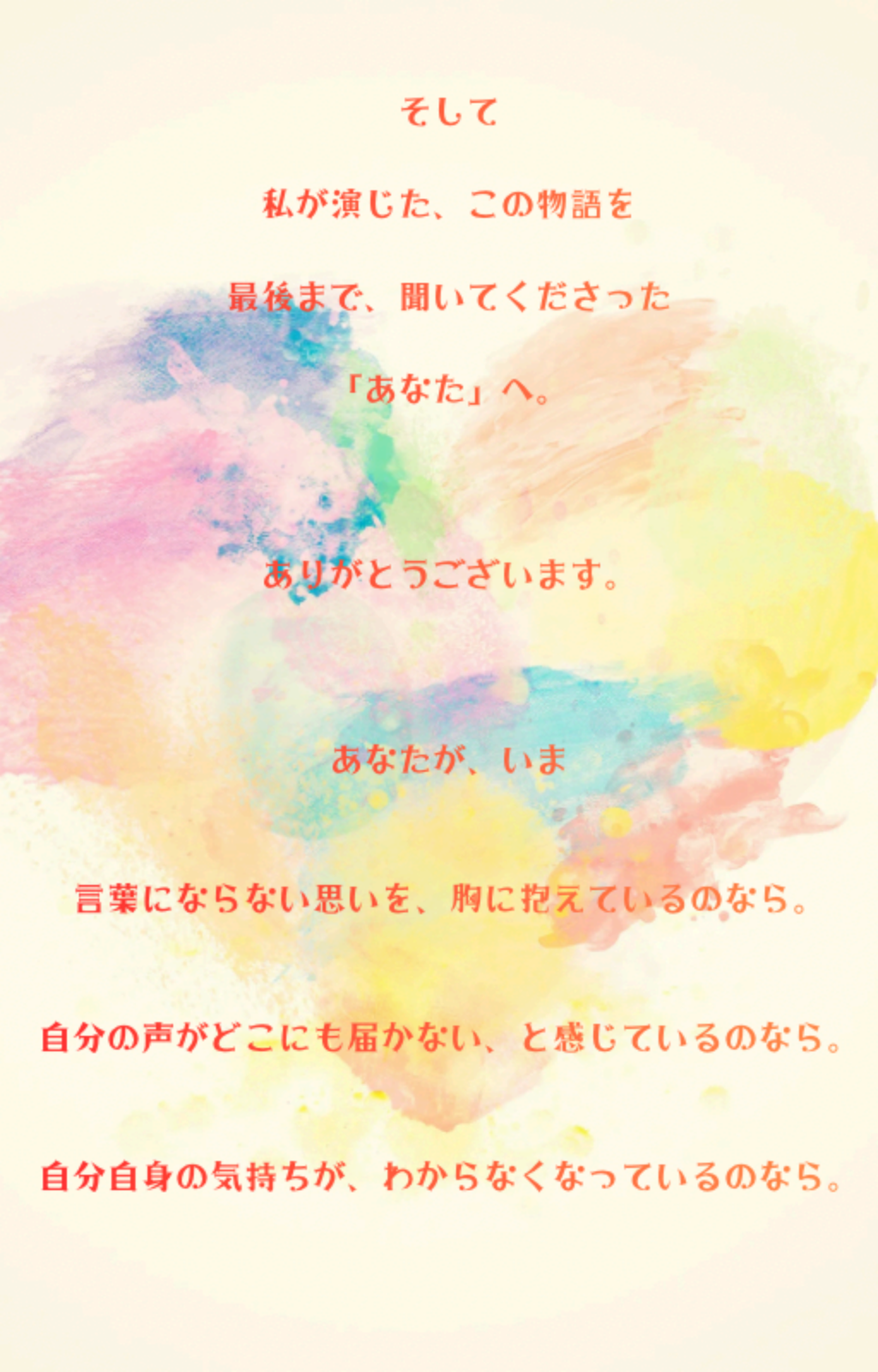
菩薩さまそのものの、妻へ。

人生の一部を預けてくださった

すべての患者さま・ご家族の皆さまへ。

見えない、でも確かに存在する世界から

私を導いてくださった、方々へ。



そして

私が演じた、この物語を
最後まで、聞いてくださった
「あなた」へ。

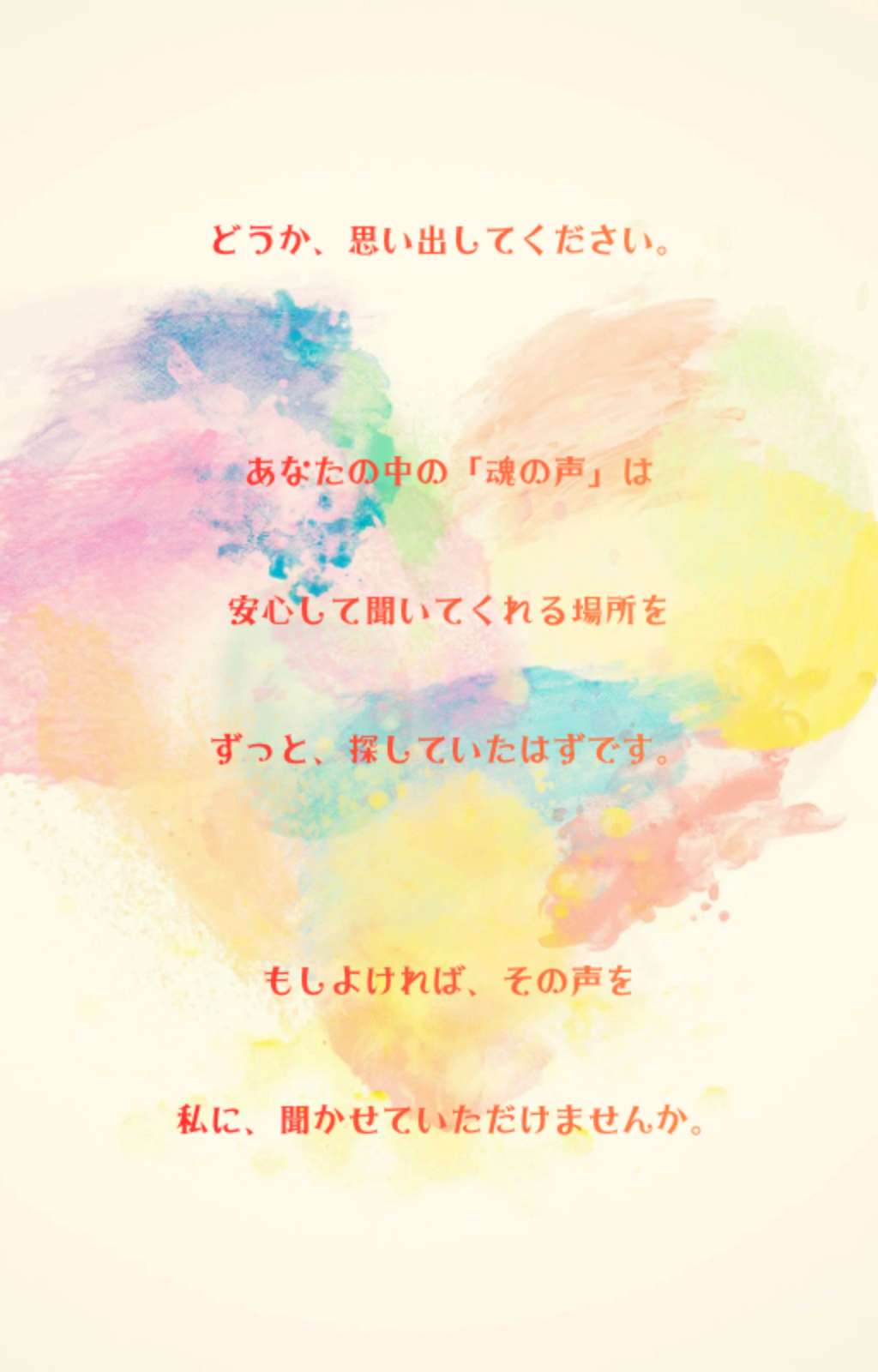
ありがとうございます。

あなたが、いま

言葉にならない思いを、胸に抱えているのなら。

自分の声がどこにも届かない、と感じているのなら。

自分自身の気持ちが、わからなくなっているのなら。



どうか、思い出してください。

あなたの中の「魂の声」は
安心して聞いてくれる場所を
ずっと、探していたはずです。

もしよければ、その声を
私に、聞かせていただけませんか。



あなたが、あなた自身の

「魂の声」を思い出す

その瞬間に

そっと、立ち会えれば、と思います。

あなたの声を、受けとめます。

光り輝く、あなたへ。

Akira
Calling8888

あとがき

「私は、なぜ、いま、ここにいるの？」

私は、何者に、なったの？」

私の、生まれて最初の感覚から

一瞬の

夢のような速さで

長い年月が

通り過ぎました。



私は、あなたの
「魂の声を聞く」使命を託されて
いま、ここにいます。

私は、あなたの
「魂の声を受けとめる」存在に
なりました。

光り輝く、あなたへ

Akira
Calling8888

「あなたの声を、受けとめます」

©Grace Calling Radiant Seed
(グレイス・コーリング・ラディアント・シード)

©Grace Calling Radiant Bloom
(グレイス・コーリング・ラディアント・フルーム)

※下記からご登録いただいた方に
募集のご案内を差し上げます

オリジナルWebサイト
「光り輝く あなたへ」

<https://www.calling8888.com/>

GRACE CALLING



Akira Calling 8888



著作権等につきまして

本講座の動画・文章・ワーク・メソッドは、すべて
Akira Calling8888 のオリジナルの著作物
として保護されています。

個人的な学びの範囲を超えたコピー・転載・共有
・再配布・AI等への無断入力をご遠慮ください。

あなたの歩みのためにデザインされた器を
他の方へそのまま渡してしまうと、魂のリズムが
乱れてしまうことがあります。

必要な方には、その方のタイミングで
届きますように。

©2025 Akira Calling8888

All rights reserved